秘匿された傷と記憶の分有を試みる
―『自伝の小説』における語りを起点として―

魏　韻典

要旨

本稿では、『自伝の小説』における複数の主体間を往還する語りの方法、または情動の描出を手がかりにし、物語に描出される様々な分有、そして応答の動態を解き明かす。それにより、台湾が過去百年間に経験した儒教的家父長制や国家権威の暴力に覆い被されたがゆえに、主体の内部に深く秘匿された、癒しがたい記憶と傷をいかに他者に分有させるのかについて考察する。

キーワード：『自伝の小説』，語り，情動，集団的記憶，台湾百年史

1. 初めに：先行研究の整理及び小説の成立背景

『自伝の小説』[1]は、李昂が一九九一年から一九九九年にかけて、台湾華語で書いた長編小説である。物語は、台湾が被った植民地支配から国民党政府による暴政に至るまで連綿と続く暴力に翻弄されながら、それと格闘する謝雪紅の生涯を描く。「自伝」における語りの主体である謝雪紅は、日本植民地時代の台湾に生き、女性解放・台湾解放を求め日本やモスクワ、中国を往還した実在の歴史的人物である。テクストは、二〇〇〇年代の台湾に生きるもう一人の視点人物「わたし」の語りを介し、大文字の歴史上で侮蔑されつづけた謝雪紅の生を甦らせ、再構築するものである。もう一人の視点人物「わたし」は、一人称でしか現れることのない、謝雪紅よりも一世代下で同じ故郷に生まれ、謝雪紅と同世代の「三伯父」を持つ女性である。また、テクストには家父長制の力を象徴する「三伯父」の昔語り、「わたしたち」という「固有名詞から解放された女性性の体験」[2]を表す語りが散りばめられ、多声的な物語空間に重層的なイデオロギーが描き出される。

謝雪紅に焦点化する語りは、一人称と三人称が混じり合った語りによって成立する。「謝雪紅」、あるいは「彼女」といった三人称の語りによって展開される場面が多く見られるが、「わたし」という一人称で語られる場面もある。もう一人の視点人物の「わたし」の語りは、一人称の語りで展開されるものである。その他に、「わたしたち」という一人称複数を表す語りも挟み込まれる。それは、謝雪紅と「わたし」を含めた、台湾人女性

の集合体を思わせる語りとして見做すことができる。また、物語に挿入される「三伯父」の昔語りは、「三伯父」によって直接語られる場面もあれば、「わたし」、「わたしたち」という一人称によって語り直され、三伯父の言葉を受け取った側の情動が入り混じった箇所もある。

物語の語り手は、以上のような複数の主体の間に流動的に現出する。物語内の時間もまた、三伯父の死が報じられる物語の現在、「わたし」が語る幼少期の記憶に流れる時間、三伯父による回想と寓話に流れる時間、そして謝雪紅の「いま」の間を往還し、時系列に沿わない語りがなされている。

『自伝の小説』に関する先行研究の多くは、謝雪紅個人の性欲をめぐる描写に焦点を絞りつつ、女性の主体性や権力の回復、そして男性的な歴史記憶との対立についての議論へ収斂してきた[3]。むろん、女性の主体性に関わる問題は、本作を取り巻く重要な論点の一つである。しかしその一方で、物語空間に底流する家父長制、植民地主義、全体主義といった暴力の痕跡、またはそれらの暴力に翻弄される台湾人の被傷性に触れて論じる研究は、現時点ではそれほど多くはない。台湾人女性の被傷性を意識する限られた先行研究の中では、台湾人女性の集団的記憶や女性共同体の連携を中心に論じた読解が支配的である。例えば、藤井省三は、『自伝の小説』が、「家父長制を支えてきた頑固な男たちとの闘いをめぐる」台湾人女性の「集団的記憶なのである」[4]と主張している。また、劉亮雅は、『自伝の小説』が、「四十年代から七十年代までの昔話を聞いて成長した台湾人女性が持つ集団的記憶を再構築し、それによって家父長的思惟の痕跡を崩す」[5]ものと指摘する。

それらの論考は、いずれも家父長制に抑圧された女性の同質性や、男性的な歴史記憶との訣別を強調する。しかし、女性間の連携や集団的記憶をあまりにも自明化し、男性的な原理と対峙させられている女性の粘り強さを一方的に強調するこれらの先行研究には、次のような欠陥があると考えられる。まず、物語に繰り返し書き込まれた男尊女卑主義を象徴する様々な寓話、または台湾が過去百年間に経験した様々な暴力的な出来事が物語に頻繁に挿入される意味合いを捉え損ねている。その上で、それらの出来事が作中人物に刻む傷痕、そして作中人物が暴力的な出来事をどのように受け止めたかということを看過している。

第二次世界大戦以後、中国から台湾を占領した国民党政府は、その統治の正統性に異議を持つ、または政府に反抗的であると判断される人物を逮捕したり、殺害したりする権限を握っていたため、台湾人が自らの被害経験を語ることは、処刑される危険性に身を晒すことを意味した。被害経験を語る権利が与えられていない状況が長く続くことで、構造的な暴力によって傷つけられた人々の傷は、葬り去られてしまうことになった。

李文茹は、李昂の作品について「台湾の政治的環境と切り離しては語れない」と述べる。また、彼女は、李昂が一九九〇年代に作家として活躍した当時の台湾社会で「フェ

ミニズム的意識と本土意識が高まり続けていたこと」を踏まえ、「抑圧されたトラウマを掘り起こす作業」と「歴史的記憶を再検討する作業」[6]こそが、李昂が小説を書くことを通して模索し続けるものであると指摘している。戒厳令解除の直後である一九九一年から構想を始めた『自伝の小説』の創作経緯について、李昂自身も、「白色テロの殺気がなおも残っている」台湾社会に対し、「女性と権力・政治とエクリチュールの関係」[7]を再考できる政治小説を執筆したかったと語っている。このことから、『自伝の小説』を読む上で重要なのは、構造的暴力に晒される存在の被傷性に寄り添う語り手の姿勢であると推測できるだろう。

以上の点から、国家による暴力装置によって揉み消された存在の声を聞き取り、二十世紀における台湾の歴史の傷跡に応答しようとする試みが、『自伝の小説』に書き込まれていると想定できる。よって本稿では、『自伝の小説』を、台湾を貫く家父長制、植民地主義、権威主義的な暴力といった歴史の傷をいくつも抱え込み、語ることが困難である生への応答を模索する小説として読み直すことを目的とする。具体的には、『自伝の小説』における多声的な語り方を手がかりにし、物語に紡ぎ出される様々な関係性や紐帯を動態的、漸次的なものとして捉え直す。それにより、国家暴力や儒教的家父長制暴力に覆い隠されたがゆえに、主体の内部に深く秘匿された記憶と傷を、いかに他者に開き、他者と分有するのかについて考察する。この考察の過程において、ジュディス・バトラーやホミ・バーバなどの理論家によって提出された、他者性の服従と模倣といった、主体が行う家父長制や国家権威の暴力との交渉をめぐる理論に触れて論じる。

まず、三伯父をめぐる語りの隙間に伏在する齟齬から、国民党政府による政治弾圧の被害者としての三伯父の被傷性を読み取る。そして、三伯父と謝雪紅の語りを介在する「わたし」や「わたしたち」という人称が用いられる語りを分析し、傷の記憶を語る権利を奪われる数多くの台湾人の声と情動を見出す。次に、「わたし」と謝雪紅の語りにおける情動のあり方の分析を通して、台湾の男性を中心とする郷土史に覆い隠された女性の被傷性や声を明らかにする。最後に、「わたし」、「わたしたち」と謝雪紅の語りが内包する亀裂を分析し、その語りが儒教的家父長制の暴力に晒された数多くの台湾人女性の、声なき叫びに応答する可能性を考察する。

2. 「わたし」と三伯父との赦し

2.1 表象される「謝雪紅」から現れる被傷性

第二節からは、従来、家父長制の文化装置として認識されてきた三伯父がもつ、二・二八事件や白色テロといった過酷な政治弾圧のサバイバーとしての側面に着目しつつ、彼の語りにおける謝雪紅表象の変容を辿っていく。そこから、彼の内奥に秘匿される傷と記憶の様態を明らかにする。

語り手の「わたし」、「わたしたち」に様々な抑圧的な寓話を聞かせて脅かし、「女にと

って生死は小事、大事は貞節」という道理を執拗に押し付ける三伯父は、滑稽かつ絶対的な他者として描かれている。三伯父は、「わたし」の父の三番目の兄であり、謝雪紅と同郷で同世代である。女性解放運動に献身し、変革を求める謝雪紅とは対照的に、三伯父は、儒教的家父長制に固執し、滑稽なほどに男尊女卑主義を振りかざす存在である。

上野千鶴子は、三伯父が「謝雪紅と同時代人として設定され、台湾土着の陋習と保守の心情の代弁者」であり、「ギリシャ悲劇のコロスの役割をひとりで果たしている」[8]存在であると主張している。三伯父は、伝統的儒教体制＝家父長制が連綿と続く台湾社会において、漢民族の男性として、優位かつ支配的な立場に立つ存在として表象されている。三伯父のことを想起する時、「わたし」が、「瞬時に恐怖に襲われるのだ。恐ろしさのあまり目を見開いたまま、知らぬ間に生唾を飲み込んでおり、全身の肌が針に刺されるのを待ち受けるかのように鳥肌立つ」などの叙述から、「わたし」は、常に三伯父による言葉の暴力を恐れていたことが読み取れる。こうした三伯父は、女性の身体を侮蔑したり、貞節を守るよう威嚇したりする寓話を語ることで、「わたし」、「わたしたち」の被傷性を増幅させる装置として機能している。しかしテクストの内部には、三伯父自身の被傷性が宿っている。それは三伯父が「「二・二八事件」の全島的「安寧のため」の大虐殺後、続けてやって来た白色テロにひっかかり」、「何の証拠もないまま」投獄され、支配的な位置から引き摺り下ろされ、被抑圧者として転落する経験に由来している。

当時、中国から台湾を占領した国民党政府は、自らの文化的支配を達成するために、自身の正統性に対して向けられるすべての異議申し立てを取り締まり、言論の自由を厳しく弾圧した。こうした不断の監視と検閲を要請する時局の中では、政府の言論統制を通して、何が語りうることで、何が語りえないことなのかが線引きされるのみならず、何を惜しむべき命とし、何をそうでない命とするのか、という線引きまでなされてしまう。警察は国民党政府による統治の正統性に異議のある、または政府に反抗的であると判断される人物を、虐殺可能である生と看做し、憲法的手続きを無視してそれらの存在を逮捕したり、殺したりする権限を掌握する。従って、国民党による検閲は、「ある種の市民を生存可能にし、他の市民を生存不可能にするために機能し」[9]ている。そのような状況の中で、三伯父を含め、当時の数多くの台湾人は、「死に曝されるような、政治的に誘発された、最大化された」[10]被傷性を抱え込んだ。「白色テロにひっかかり」、「何の証拠もないまま」投獄された三伯父は、まさにこのような被傷性を抱えている存在であった。そして、三伯父の被傷性は、彼に語られる謝雪紅の表象から見出すことができるだろう。

「幼いときから、「謝雪紅」の三文字は、三伯父がわたしを脅すのに使う切り札のような言葉であった」と、「わたし」は考えている。確かに、三伯父は、「わたし」に謝雪紅がいかに禍々しく恐ろしい女であったか、と繰り返し語り続けた。たとえば、「こうなったのもあの女が生まれつき浮気っぽいからで」という発話や「謝雪紅は洪家の「童養媳」

となったからには、張樹敏と訳も分からぬ同棲なんぞしてはならんかった」という発話から分かるように、「謝雪紅」の身振りや心情は常に三伯父によって解釈され、意味づけられている。それにより、三伯父にとって、「謝雪紅」はあくまでもからっぽの客体であり、その空所はすぐ三伯父の意識や欲望に充填されると考えられる。

「謝雪紅」を用いて「わたし」を脅したり、彼女の言動を繰り返し批判したりした三伯父は、二・二八事件という、国民党政府による大殺戮前後の謝雪紅の話を好んでよく語る。それらの語りは、「淫乱、残忍な毒婦だとされている女性」、「禍々しい恐ろしい女」といった表象に回収することのできない情動や関係性のあり方を孕んでいる。例えば、「「酒家女となって我が身を売っていたのも、工作のためじゃった」と三伯父は繰り返しこの点を強調したものだった」、「そして三伯父はさらに厳正に謝雪紅を弁護する」などの、謝雪紅の行為を執拗に解釈する叙述が見られる。また、「雪紅ちゃん」という親密さを込めた呼称も「この時期」の謝雪紅にまつわる発話に見られる。謝雪紅との親密性を語る中で、彼女がその行為に至った理由まで代弁する三伯父の語りに、謝雪紅を侮蔑し続けた従来の語りとは異なった謝雪紅の表象を見出すことができる。それはおそらく、生存可能な主体であり続けるために、国民党の規範と折り合いをつけることを余儀無くされる三伯父が、革命という「工作」のために、酒家女となったり、「国民党と深い関わりを持った」りした謝雪紅に感情移入し、共感を寄せたからであろう。

また、厳しい検閲や政治的迫害に晒されることで、「理屈を捏ねて事の是非を論じるのが大好きだった」三伯父は、世界の普遍的な道理が語れると信じ込んでいた発話の位置から引き摺り下ろされ、被傷性を抱える存在へと転落する。それゆえに、謝雪紅を「鬼、反逆者、反家父長的人物」として罵倒し続けた三伯父は初めて、同じ構造的な暴力に晒された謝雪紅の言動を理解するようになった。それにより、彼は謝雪紅と初めて同一の地平に立ち、理解可能な存在として彼女を捉えるようになったのである。

2.2 暴力の空所に充填する三伯父の記憶と希求

牢獄から釈放された三伯父は、国民党政権に参加し、「海岸派」と呼ばれる地方系グループの下級幹部となった。かつて自分を逮捕し投獄した国民党の組織に参入した三伯父は、「国民党軍に対する大げさな賛美」を延々と続け、国民党が「選挙で票を買収する際、味の素や肥料、百円札を届ける手伝」いをし、支配者が理想とする言動を絶えず模倣する。こうした三伯父は、自らを国民党が理想とする主体たらしめるために、「国民党の宣伝に従い」、謝雪紅を「極悪非道の共匪」、「狐の化け物」、「酒場女」として罵倒し、彼女を絶対的な他者として捉え直した。

支配者が理想とする言動を執拗に模倣し、反復する三伯父のこのような身振りに注目した場合、現体制の反復的再生産に対する抵抗の可能性について議論するバトラーの「服従化」、またはバーバの「擬態」といった観点を導入するのは有効であろう。

バトラーは、「規範の複雑な歴史性は、規律、統制、処罰の諸関係から切り離すことができない」[11]と述べた。とすれば、言説や行為の検閲を通して、ある種の市民を生存可能にし、他の市民を生存不可能と裁断する支配者の規範を引用し、服従を通して支配者を模倣することこそが、「人」として適格であり、「人」としての生存の条件となるものである。それゆえ、支配者によって形作られる共同体に服従し、参入することで、三伯父は、被抑圧者としての被傷性を免れ、自らの権勢や優位性を回復し維持しようとする。言葉を換えれば、三伯父は、自らを侵害する暴力的な装置に加担することで、暴力に晒された傷を、別様な暴力で覆い隠し、自身の優位性を担保していることになる。

しかしながら、擬態というのは、「類似しているために、ある種の服従を意味するが、同時に、類似しているが完全な同一化ではないために、ある種の不服従をも意味して」いる[12]。擬態は、植民地の被植民者が、「帝国の中心に存在すると想像した支配者の像を延々と擬態しつづけなければならず、しかし、決してその像と同一化することはできない」[13]という構造を内包している。実際、三伯父の反復行為が内包する「ずらし」は、三伯父に表象される謝雪紅と国民党政府に形作られた謝雪紅表象とのあいだに走る亀裂から見出すことができるだろう。こうした逸脱と亀裂は、三伯父によって意図的に忘却され、無化されると同時に、彼の被傷性や抵抗的な姿勢を曝け出すものである。

> 三伯父は世論に対し一人反対し、謝雪紅が中央山脈の高く険しい山地の人知れぬ某所に隠れ続けており、再起を期しているのだ、と頑なに主張していた。（略）そうしてから三伯父（の）国民党軍に対する大げさな賛美が延々と続き（略）同時に謝雪紅に従い中央山脈の「台湾豹さえもめったに出ない」群山に潜む兵士装備を、再三に難ずるのだ。「生死もしれず、必敗疑なし」（二三九頁）（下線筆者）

下線部の三伯父の言動のうち、後者には、謝雪紅を批判する意味合いが確かに込められている。しかしそれと同時に、彼が執拗に反復する、国民党に作り上げられた言説と三伯父のこの言説との間に、ある種の亀裂や逸脱が読み取れる。国民党政府は、「二・二八事件」に果敢に抵抗する謝雪紅を逮捕し、処刑することができなかった。そのため、謝雪紅に対する闘争や清算は、彼女を「中国に逃げる」敗者として辱める言説を流布することに転化された。こうした国民党に作り上げられた言説を延々と繰り返す三伯父の言葉の中では、「謝雪紅の所在」をめぐる語りだけは、国民党の言説から逸脱する側面が見受けられる。その逸脱は、「中国の酒家」と「中央山脈の高く険しい山地」という場所の相違と、「逃げる」と「いる」という動詞の相違に現れる。

謝雪紅が霧に覆われた深山に隠れてまだ捕まっておらず、捲土重來の可能性があることに三伯父が固執したのは、国民党政府の抑圧に抗いながら生きる意欲を、三伯父自身の内面に宿しているためではないか、と推測できるだろう。確かに、三伯父の語りにお

ける亀裂の反復について、語り手の「わたし」は次のように推測し、補述している。

> 三伯父は必ずこの点を強調はしていたが、実は謝雪紅はなおも霧に覆われた深山に隠れて未だ捕まらず、捲土重來の可能性ありと繰り返し言うことで、一種の安堵を覚えていたのだろう。それにより、「二・二八事件」で捕まって牢屋に入れられ銃殺されたり、行方不明となった親友隣人、地方の有力者、そして彼自身の「二・二八事件」を反芻していたのだ。（二三九頁）（下線筆者）

引用箇所に示されるように、三伯父が謝雪紅の再起に固執し、彼女の無事を祈るのは、安堵と慰めをそこに求めるからであると、「わたし」は解釈している。それは、「謝雪紅＝パルチザン英雄伝説こそが「二・二八事件」後の暗黒時代を生きた民衆の心の支えであり、三伯父もそんな心情を反語的に語っていた」[14]からである。つまり、三伯父は、現実社会に実現されなかった、失われた正義を取り返すことの可能性を謝雪紅に託すことで、慰めを得ているということができるだろう。

厳しい検閲の体制の中で、傷つきやすい主体に転落する際、三伯父は、言葉の反復や堆積を通して、空洞化された「謝雪紅」という客体に、別様な感情や欲望を充填し、「謝雪紅」との新たな関係のあり方を密かに紡ぎはじめている。議論好きの三伯父が二・二八事件と白色テロにひっかかったことだけは語らなかったことを踏まえるならば、「謝雪紅」という空所に充填されるのは、まさに、厳しい検閲の中や国民党勢力との強い結束の中で、三伯父の、決して語ることができずに沈滞している傷つけられた記憶、または正義への希求に他ならない。「心のよりどころ」や「一種の安堵」という表現が示しているように、三伯父は、「謝雪紅」に依存することによって初めて、政治迫害で受けた癒しがたい傷の分有や傷からの回復が可能になった。さらに、「捲土重來の可能性あり」という言葉の反復からは、彼が「謝雪紅」を救済者、力強い存在へと引き立たせていることが読み取れる。「謝雪紅」という空所は、三伯父が彼の尊厳や自由をたやすく破壊した国民党政権に異議を唱え、正義の返還を希求することのできる、内密かつ安全な在処になったといえよう。

言葉の編み目に伏在する、謝雪紅との繋がりを通して、動乱時代に置かれる三伯父は、体内に深く秘匿され、分かち合われることなく閉ざされた傷を、初めて他者に分有させ、不可能な赦しの到来を祈ることができる。こうした情動の分有を通して、三伯父は、苦しみを取り除かれ、「一種の安堵を覚えていた」。従って、「謝雪紅」という表象の空所に自らの祈りや傷を充填する三伯父は、翻って言えば、言表化することができずに喪失した記憶と傷を、彼が侮蔑し続けた「謝雪紅」によって充填され、その記憶に対して「謝雪紅」から応答されていると言えよう。

2.3 閉ざされた記憶と傷を分有すること

ここからは、語り手の「わたし」が介在することで、紡ぎ直される三伯父と謝雪紅との相互的な応答関係を取り上げる。そして、不特定多数の存在と思われる「わたしたち」という人称表現に着目し、三伯父と謝雪紅によって語られる傷と記憶が、より数多くの二・二八事件と白色テロの被害者に分有される可能性を見出したい。

「わたし」は、「この歳末の帰郷した際に、謝雪紅に関してもっと詳しく聞きたいと思っていた」が、三伯父の突如の死によって、その機会は永遠に失われた。従って、「わたし」は、謝雪紅の生を執拗なまでに喚起し続けると同時に、自分とは相容れない存在としての、三伯父の生の断片を拾い集めつづけ、謝雪紅と三伯父の生を紡ぎ直しはじめる。

「三伯父がこれほどまでに謝雪紅の弁護をしたのは、伯父自身が体験したものの決して語ろうとはしなかった「二・二八事件」と関係があり、このことにわたしが気づいたのは長い歳月が過ぎた後だった」などの叙述に示されるように、幼少期から三伯父による言葉の暴力を恐れ、彼を絶対的な「他者」として認識していた「私」は、三伯父との記憶を手繰り寄せることを通して、三伯父の生を再び確かめ、理解するようになった。こうして、三伯父が「謝雪紅」に投影したものの、誰にも応答されなかった祈りは、「わたし」に聞き取られ、また「わたし」はそれに応答しようとした。

謝雪紅が汽車で逃亡することを史料で読み取った「わたし」は、「わたしの三伯父と「二・二八事件」との関わりも、汽車の中で生じたと聞いている」ことを想起する。二・二八事件における走行中の汽車という地点から、三伯父の記憶と謝雪紅の記憶との交差や、情動が共振する隙間を「わたし」が想像する。「わたし」の想像の中では、汽車で逃亡する謝雪紅と、汽車で逃走する三伯父が、時間的、空間的な制約を超えて現れている。具体的には、同じ走行中の汽車に乗り込み、死を恐れながら、「致命的に白い細い手」を必死に隠す三伯父と謝雪紅が逢着する場面が、「わたし」の語りに次のように現れてくる。

学歴があり読み書きのできそうな者たちは、あらゆる反動派の根源として看做されるため、色白で日焼けしておらず、労働による関節肥大もない細くて長い腕をしていれば、軍警察に逮捕され、その場で機銃掃射を受けた。そのため、「多少は学問のある三伯父」は、農民が彼の「左右の靴や致命的に白い細い手を隠してくれた」というように、農民の援助が必要な、「死に曝されるような、政治的に誘発された、最大化された」[15]被傷性を抱える存在として現象する。一方、謝雪紅は、まるで三伯父と同じ列車に乗り込んだ存在であるかのように現象する。彼女は田舎の婦人に変装し、「手が真っ白で露見しそうだったので」、「両手を上着の中に突っ込んで隠す」必要のある存在として表象されている。こうした二人の近似した身体性やその身体性に由来する恐怖を通して、それまでは表象する主体/表象される客体として位置づけられていた三伯父と謝雪紅の生に、有機的な繋がりがもたらされる。生存のための共闘を通して、「わたし」は、一方的なものに留まっていた三伯父の謝雪紅との連帯の回路を、親近感のあるものとして紡ぎ直す契機を

見出している。

すなわち、時間、空間、主体間を自在に往来したり越境したりする「わたし」の語りを通して、分断された時間や地域に置かれた三伯父と謝雪紅は、共通した経験や恐怖の感覚によって繋ぎ直された。三伯父と謝雪紅の身体に封じ込められた、政治迫害による生命の危機に瀕した際の恐怖の記憶が再び呼び起こされることで、お互いに結びついた生の感覚、情動の分有といった相互応答の可能性をここに見出すことができるだろう。

これまでの分析を通して、『自伝の小説』は、語り手の「わたし」が、理解不可能な対象であった三伯父の語りを手繰り寄せ、彼の語りの中に存在している痛みを引き摺り出し、それに応答しようとする物語として読まれうるということを明らかにした。

最後に、「わたしたち」という人称表現の変容に注目すべきだろう。『自伝の小説』において、「わたしたち」という人称は多用されているが、それは主に、「固有名詞から解放された女性性の体験」[16]を表すものとして機能している。しかし、謝雪紅と三伯父が汽車で逃亡する場面において、こうした語りの機能から逸脱する表現が読み取れる。

> あの汽車はわたしたちにとって常に命に関わる場所だった。（略）
> わたしたちを乗せて逃してくれる、と、わたしたちが最後の希望を寄せる移動中の汽車とは、わたしたちを絶体絶命の窮地に追い込むこともあるからだ。（二四七頁）

引用箇所の叙述には、「女性の普遍的体験」に回収されることのない、二・二八事件の大逮捕のさなかに汽車で逃亡した者たちにしか共有されえない経験や情動が書き込まれている。従って、引用箇所における「わたしたち」は、特定された主体の声を、不特定多数の存在と錯覚させる二重構造を持っている。

汽車という空間には、正確な数を把握することのできない、具体的な顔を持たない複数の逃亡者が存在する。それゆえ、謝雪紅の声と三伯父の声に、複数の逃亡者の声を重ね合わせることができるだろう。従って、「わたしたち」とは、謝雪紅と三伯父を共約する人称であり、この人称は二・二八事件に巻き込まれ、傷つけられ、殺された数多くの台湾人という複数の存在へと敷衍され、別の他者の体験をも包摂するものとなる。複数の空間、時間に置かれていた多様な主体を一つの空間に収斂させる語りの方法を通して、自らの体験を語ることのできない傷者や、暴力的な殺戮で失われた死者たちの、抹消された経験や苦痛を現前化させ、傷や情動を他者に分有させ、共振する間隙が開かれる。

3. 「稗史」に覆い隠される別の物語

3.1 集団的記憶に捨象された暴力の痕跡

ここまでの分析から、他者の位置に入り込むことができる語りの仕掛けにより、様々な主体の内部に深く秘匿され、分かち合われることなく閉じられていた記憶を見出すこ

とが可能となった。

冒頭で述べたように、台湾社会が長期にわたる独裁的な権力支配から離脱した一九八〇年代以降、白色テロ時代がもたらした人間性のねじれや傷を暴き出し、忘却された記憶を追及する作業は、文学、歴史学、政治学をはじめとする様々な分野で行われてきた。従って、三伯父のような、二・二八事件や白色テロサバイバーの声は、多岐にわたる文学作品や歴史研究によって記述され、次世代に引き継がれる可能性に開かれている。一九九〇年代に執筆された『自伝の小説』も、このような抑圧された歴史を再構築する潮流の中で位置付けられるものであろう。

しかし、様々なサバイバーによる記述や証言は、依然として権威的な色合いを幾分か帯びている。これらの証言は、かつて国民党政府による人権侵害の真相を暴露し、戒厳令体制下における支配層の悪行を徹底的に批判することが求められたため、個別の複雑な感情を捨象した悲しみや怒りの感情の表象を通じて、「社会内部にいるすべての諸集団・ジェンダーを概観する」[17]語りの枠組みを構築することが重要視されてきた。

このような共同体を代表しているかのように装う語りは、常に「男性中心的ナショナリズム思考によって形成され、さらにその思考ですべての台湾人のアイデンティティを包括していこうとする問題を抱えている」[18]。そのため、台湾社会で連綿と続く儒教的家父長制の暴力に晒される女性の体験、または日本植民地時代をめぐる記憶や暴力の痕跡は、この時期における歴史記憶の記述から排除され、長らく葬り去られてきた。

一方で、陳芳明によれば、「国家主義及び歴史的記憶に対して、李昂の女性としてのアイデンティティは、彼女に抵抗感を持たせる。要するに、現在流布している普遍的な歴史記述、いわば主流となる台湾史を彼女は認めない」[19]。このことから、こうした忘却に異議を唱え、共同体の語りから排除された女性の声に耳を傾け、それに応答しようとする試みが、『自伝の小説』に仄めかされていると想定できるだろう。

従って、本節では、女性の粘り強さと団結を一方的に強調する先行研究では見落とされてきた、『自伝の小説』の語りに宿る恐怖と痛みの記憶に着目し、その分析を試みたい。具体的には、『自伝の小説』において取り上げられる家父長制的な礼教イデオロギーに基づく民衆史に対する情動の描出や、その反応としての語り手の人称の混乱を手掛かりに、男たちが作り上げた「台湾人の稗史」を聞く女性たちの情動の余白から、いかなる物語が流れ出るのかについて分析する。それにより、台湾をめぐる歴史記述に取り残された女性の傷と感情を再発見し、それに対する応答の可能性について考察したい。

3.2 「情動の共同体」から切り捨てられた女性の被傷性

『自伝の小説』において、三伯父によって語られるのは、謝雪紅にまつわる物語や様々な恐ろしい寓話のみならず、日本植民地時代における虐殺の話も、「その場に居合わせたかのような臨場感」で、「わたしたち」に語り継がれてきた。三伯父が好んで語るのは、

日本人が抗日義士を虐殺した後の死者の首の話である。なお、ここでの「わたしたち」とは、謝雪紅よりも一世代下の語り手の「わたし」や、「わたし」と一緒に噂話を聞いていた親戚や近隣の人などの、「わたし」と同世代の少女であると想定される。

> 首を満載した牛車が何輌も続いたものよ。(略) やはり首を山積みした重たい牛車の車輪に轢かれてしまうんじゃ。グチャグチャと、油絞りに南京豆を潰すようなもの。(略) 車輪が次々と轢き潰すもんじゃから、坂道の角々は赤白黒と色とりどり (略) 時には車輪が片寄って、目のあたりを轢き潰すと、まあるい目玉が筋を引いてブチュッと飛び出し、遠くに飛んでは木や草の枝葉の先にぶら下がった。
>
> その当時、夜中にその山道を歩くと、坂や曲がり角では蛍が群れているようにキラキラ光っておるんじゃ。近寄ってみるとな、ワッと、それはたくさんの目玉なんじゃ。(六八頁) (下線筆者)

下線部の叙述のように繰り返し述べられた「轢き潰す」という表現は、受難者の身体の痛みや殺戮の残虐性を象徴するものと考えられる。一方で、轢き潰されることを頑なに拒否し、「木や草の枝葉の先にぶら下が」り、「坂や曲がり角では蛍が群れているように」キラキラ光っている目玉は、「私たちは今もここにおり、存続している」と主張し、噂話の物語世界内に置かれる通行人や、物語世界外の聞き手の双方を巻き込み、聞き手に応答されること、つまり記憶されることを要請するものとして機能している。換言すれば、「牛車に満載した首」の噂話は、「日常的な言葉や定型的な表現」とは異なる身体性や肉体性にまつわる誇張した表現を通して、聞き手の感情を揺さぶり、記憶に留まることを要請するものであろう。

一方で、謝雪紅の女性としての内面に光を当てる部分に焦点化する語りは、次のように挿入され、織り交ぜられる。ここでの謝雪紅は、日本統治時代に置かれた少女時代の謝雪紅であり、「彼女」という三人称の語りとして現象している。

> 彼女も別の噂を聞いていた。中部の厳しい陽射しの下で、切り落とされた首にはたちまち蛆虫が湧き出し、無数の白く丸々と太った虫は首に群がったばかりか、牛車や牛の体にさえも取り付いていた。(六九頁)

謝雪紅が聞いていた「牛車に満載した首」の噂話においても、抗日事件の死者の身体が、不気味かつおぞましいものとして表象されている。「わたしたち」と謝雪紅が聞いていた「噂話」のなかで、牛車に死者の首のみが満載している理由は次のようになっている。遺体は五体揃って埋められないと、成仏することができず、来世に生まれ変わることもできない。日本兵はこの道理をよく心得ており、遺体処理に当たっては、わざわざ首と

体とを別々の牛車で運んだのである。「どの首がどの死体のものだったか、まるで分かりゃせんかった」こと、その理由が噂話に強調されることや、日常的な描写から逸脱し、「異化」した死者の身体描写は、植民者の日本人の残虐さを引き立たせ、被植民者の感情を揺さぶり、嫌悪、屈辱などの否定的な情動を喚起させる役割を果たしている。すなわち、「牛車に満載した首」の噂話は、誇張した表現を通して、被植民者に植民者への憎しみを共有させ、国家に対する忠誠心や献身を促せることで、被植民者を「情動の共同体」に繋ぐレトリックとして機能している。こうして、その噂話は抵抗や憎しみの記憶として、語り手の「わたしたち」が生きている次の世代に受け継がれてきたのである。換言すれば、物語世界内の死者の身体から湧き出した蛆虫や臭気は、レトリックによって物語外の人間の記憶を揺さぶり、応答されることを要請しつづけているのである。

また、この噂話が「絶えず語り継がれた」という表現や、「わたしたち」と分断された時制に置かれる謝雪紅も「牛車に満載した首が小山のようだった、という噂を聞いたことがあった」と語る部分があることから、この噂話は、「絶えず語り継がれた」ことによって、台湾人の稗史として位置付けられるものであることが分かる。換言すれば、「牛車に満載した首」の噂話は台湾人の間で反復されることで、厚みを増やし、「台湾人の集合的記憶」として、支配的なナラティブとしての位置を占める。

ここで注目すべきなのは、噂話における「赤というんは脳味噌で黒というんは長い弁髪」[20]という男性性を強調する記号である。そこから、語り継がれる受難者はあくまでも男性であり、女性は共同体の物語にあらかじめ排除されていることが読み取れる。ここでは、悼まれる死と悼まれない死の線引きが男性と女性の間で作動し、被植民者女性の存在やその痛みは無視されてきた。つまり、被植民者としての女性の経験は、男性中心的なイデオロギーと絡み合う被植民者の共同体の語りにおいて、再び抑圧され、存在しないことにされ、男性の抵抗や憎しみの記憶のみが受け継がれてきたのである。

3.3 情動の余白から流れ出す女性の物語

以上のような、被植民者女性の経験や痛みが共同体の語りに抹消される原因は、バトラーによる「承認の規範」の問題として捉えられる。「承認の規範」について、バトラーは「特定の喪失に直面すると恐怖を覚えるのに、他の喪失を考慮しても無関心だった」、「わたしたちが文化的な反射作用によってある生の喪失を悼み、けれども別の生が失われることに対して冷淡な反応を」示す[21]と指摘する。だとすれば、「民衆史」、「稗史」の語りにおける女性の不在、または女性の身体性の欠如は、女性の喪失を承認可能性の領域からあらかじめ排除することと考えられるだろう。つまり、女性の傷つきやすさや喪失は、嘆かれることもなく、抗日事件をめぐる共同体の語りの中で抹消されるのである。

一方で、三伯父の寓話に耳を傾ける「わたしたち」は、三伯父の語りを完全に受動的に聞き取るものの、その趣意に降伏することはしない。三伯父が「その場に居合わせた

かのような臨場感」で語った死者に対して、「わたしたち」はあくまでも冷淡な反応を示し、細やかな情動も反応も喚起されなかった。また、「わたしたち」と同じように、噂話に対する謝雪紅の態度や反応は物語に一切描かれず、抗日事件の死者に対する彼女の応答は欠如していることが読み取れるのである。「情動の共同体」に引き込まれることなく、自分のものではない喪失に冷淡な反応を示す「わたしたち」と謝雪紅の態度は、国、国家、民族といったイデオロギーと絡み合っている「情動の共同体」というくびきから逃げ出していき、女性の傷つきやすさやその喪失と、「稗史」で語られた抗日者男性の喪失との間で生じる矛盾と摩擦に直面する姿勢として見なすことができるだろう。

「わたし」と謝雪紅は、抗日事件をめぐる話にあくまでも無関心であるため、抗日事件の死者に応答し、その記憶を継承することはもはや不可能である。従って、誇張して語られた「牛車に満載した首」の噂話を、ごく普通の感覚で受け取る「わたしたち」と謝雪紅は、彼女たちが排除された「情動の共同体」に同調し、応答する可能性から切断されている。しかし、既存の応答の回路が断ち切られると同時に、逆説的にも、ここには別様な応答の回路が生み出される。

行為遂行性はそのつど新しく再生するものであり、「発話が、特定の発話者やそれを生み出した最初の文脈から縛られることはなくなる」[22]。確かに、「牛車に満載した首」の噂話が「わたしたち」と謝雪紅の身体を通過した際、その噂話はすでに固有の文脈から断絶され、新しい意味を生成している。ここで着目すべきなのは、「三伯父は、こんな壮絶な記憶を語る時にも、「女にとって生死は小事、大事は貞節」という礼教の教訓も忘れない」[23]という点である。「牛車に満載した首」の噂話を聞いた「わたしたち」は、その噂話とは因果的連鎖を持つことのない、「貞節を守って死ぬ方法」、「死ぬまでレイプされるという凌辱に至っての具体的な方法」といった「貞節」や「レイプ」を巡る問いかけへの思索に引き込まれている。それにより、「わたしたち」は、「最大の恐怖」、「底知れぬ恐怖」に大きく揺さぶられている。「牛車に満載した首」の噂話とは異なる地点で、恐怖の情動が猛烈な勢いで「わたしたち」に襲いかかっていたのである。

また、母親から「周囲で起こった大小の「反乱」の噂を聞いていた」時、「いざとなったら辱めを受けぬよう」、「鋭利な鋏」を「喉か心臓に当てて一突きせよ」と教戒された謝雪紅も、その後に様々な抗日事件を聞いた際、「鋏の刃を閉じ、両手で柄を握ると、心臓めがけて突き立てる仕草をする」。それにより、「真紅の血が涙のようにゆっくりと浅い傷口から染み出てくる」。すなわち、謝雪紅も、「牛車に満載した首」の噂話や「「反乱」を平定し、「暴徒」も殺され、死体は腐乱したという噂」を聞いた際、別の出来事に引き寄せられ、生身の痛みを突きつけられた。彼女も、抗日事件の受難者の身体に還元されえない身体の痛みや被傷性を喚起されたのである。

このような分析から読み取れることは、「牛車に満載した首」の噂話を聞いた際に生起する恐怖の情動が、本来の噂話と有機的な連関や因果的連鎖を持たない別の物語から生

じる情動に移行し、拡散したということである。換言すれば、「牛車に満載した首」の噂話は、情動の移行を通して、別の記憶、別の解釈、別の物語になっていく。それは、植民者の残虐さや植民地男性の惨めさをひたすら語る、男性を中心とする郷土史によって押し隠された、「戦乱時に日本兵か台湾「匪徒」からうけるかもしれぬ侵害」の物語、「辱めを受けぬよう」に自決する物語、「死ぬまでレイプされる」物語である。

すなわち、「わたしたち」と謝雪紅は、既存の文脈に依拠しつつも、その文脈に覆い隠された別の物語に引き込まれ、情動が喚起されている。それにより、男性を中心とする郷土史、国家のイデオロギーが絡み合っている「稗史」に覆い隠された、もう一つの痛みの物語が引き出されている。それは、たとえ稗史という集団的記憶から抹消されても、確かにあった女性たちの痛みと記憶である。植民地男性が植民者に殺されると同時に、植民者の男に強姦されたり、植民地の男の教訓で自死を余儀無くされたりする女性がおり、男性に犯され苦しめられる女性がおり、貞節を守るように威嚇される女性がいる。しかし、それらの存在や物語は、「稗史」の歴史叙述や台湾の集合的記憶によって抑圧され、公的な記憶にならないものとして、葬り去られている。

従来、「牛車に満載した首」の噂話に包摂され、消去されるほど矮小化される「貞節や強姦」の記憶は、「わたしたち」と謝雪紅の情動の在り方を通すことで、その苦痛が大殺戮による苦しみと対置されるものとして捉え直された。それと同時に、情動の欠如/不在を通して、「牛車に満載した首」の噂話を空洞化させ、「稗史」の権威を失墜させ、その言説の正統性を撹乱することができる。さらにいうと、「牛車に満載した首」にまつわる寓話と、「貞節を守って死ぬこと」、「死ぬまでレイプされること」との間にある情動の断裂は、様々な欲望や暴力が錯綜した女性の身体やその被傷性が、決して男性の身体に容易に回収されないことをも含意しているだろう。

3.4 秘匿された被傷性や恐怖を分有すること

これまでの分析で見てきたように、「牛車に満載した首」の噂話が語られる場面では、「わたしたち」と三伯父との対話や「わたしたち」の思索が基底となり、三人称の「彼女」という謝雪紅をめぐる語りが挿入され、織り交ぜられている。このような語りの方法は、分断された時制、空間に置かれた「わたしたち」と謝雪紅を同時に現前化させる役割を果たしているのみならず、ある連帯、共振の可能性を生み出すことができると想定しうる。それはどのような連帯、共振の可能性だろうか。

確かに、「わたしたちは「どうやって」死ぬまでレイプされるのか」という問いが「わたしたち」の語りに執拗なまでに反復されることのうちには、この問いを巡る困惑や恐怖を他者と分有しえない「わたしたち」の不安が表されている。また、謝雪紅の語りにおいても、「そして改めて鋏の用途を訓示されるのであった」などの受動的な表現からは、謝雪紅が他者の訓示を一方的に受け止める姿勢が読み取れ、他者との交渉や共感の機会

は彼女に与えられていない。それは、「死ぬまでレイプされること」、「日本兵か台湾「匪徒」からうけるかもしれぬ侵害」、「辱めを受けぬよう」に自決することがあまりにも恐怖であり、恥辱であるために、彼女がそれを言葉で表し、他者に問いかけ、分有を求めることが不可能であることを意味している。

一方で、「わたしたち」と「彼女」という二つの主語を交錯させ、同じ文脈の中で同時に現前化させる語りの方法は、「わたしたち」と謝雪紅が生きていた二つの時制を、一つの磁場の中に紡ぎ合わせる機能を果たしているといえよう。それにより、「わたしたち」と謝雪紅の、本来主体の内部に深く秘匿され、分かち合われることなく閉ざされた被傷性や恐怖を、同じ磁場で共振させ、分有させていくことを可能にする。また、このような共振関係の構築は、次の語りから一層はっきりと読み取れる。

> （戦時でもなく、匪徒反乱の時でもないのに、わたしたちは「どうやって」死ぬまでレイプされるのか？）
>
> わたしたちの中には夫を持つ者もいて、自分の夫を「役立たず」とからかう者もいた。こんな役立たずモノが、どうしてわたしたちを犯して死に至らせることができるのか？
>
> 一度入って来るや、わたしたちは痛さのあまりで死んでしまうか！（略）
>
> （だが鶏や鴨の腹や豚羊の腸を切り開くには、上等な「内地」日本式の鋏でも、切る手に力を入れてこそようやく鋭利な両刃も少しずつゆっくりと前に進み、脂身や筋が入り交じった切り口を割いていけるのだ。）（略）（七一、七二頁）（下線筆者）

長い引用文だが、下線部における主語の混乱や人称間の越境に着目すべきだろう。引用箇所の「わたしたち」は、もはや従来の語りにおける、三伯父の噂話を聞く「わたし」と他の「こども」たちに収斂されず、より多様な存在へと敷衍されていく。

まず、台湾では日本植民地時代にしか用いられない「内地」という呼称、そして謝雪紅が母親から上等の鋏を受け取った物語内容から、「上等な「内地」日本式の鋏」という叙述は、謝雪紅によって語られるものであると推測できる。だが謝雪紅のこの語りは、彼女と同じく日本植民地下の台湾に置かれた、近似した生の経験を共有する複数の女性の語りと重ね合わせることもできるだろう。また、「わたしたちの中には夫を持つ者もいて」という叙述から、「わたしたち」は、三伯父の寓話や噂話を聞いていた、語り手の「わたし」や親戚の子供に収斂されるものではない。それはむしろ、より広く、普遍的な女性の声をも包摂する語りとして読むことができる。

引用箇所において、複数の主体に往還している語り手は、異なる時代や地域に離散している様々な女性主体を繋ぎ合わせ、一つの磁場において現前させていく。速やかに切り替わり、交錯しつつ現前したり、重層的に絡み合ったりした語りの方法を通して、個

人の身体のみに堆積され、分かち合われることなく閉ざされた恐怖と痛みの記憶を他者と共感し合い、分有する可能性が開かれる。

さらにいえば、速やかに切り替わる主語の間に挟まれ、具体的な発話主体を推測しえない「一度入って来るや、わたしたちは痛さのあまりで死んでしまうか！」という発話は、複数の地点や時制に置かれた複数の女性の叫びを一つの磁場で収斂させ、同時に響かせるものとして理解できるだろう。ここにおいて、様々な主体の声が混ざり合い複雑に絡み合い、複数の「わたしたち」の声が輻輳する場が形成され、被傷性と恐怖の情動の共振と分有をより一層はっきりと読み取ることができる。

このようにして『自伝の小説』は、台湾の男性を中心とする「郷土史」、「稗史」に覆い隠されたがゆえに、主体の内部に深く秘匿され、存在しないことにされた恐怖と痛みの記憶を、主体間の越境という語りの方法によって再び現前させ、伝播させていく。それにより、植民地主義による抑圧、それに対する反乱、そのどちらからもこぼれ落ちて、ただ儒教的家父長制支配の下に置かれ、様々な時制や空間に分断された女性の記憶と傷が他者に開かれ、分有される可能性が生じるのである。

4. 終わりに

本稿では、『自伝の小説』における、国民党政府による人権侵害の被害者や、家父長制の暴力に晒される女性の傷と記憶に寄り添っていく語りについて考察してきた。具体的には、複数の主体間を行き来する語り方や、語りの細部に潜む情動を分析することで、語ることが困難である傷をいくつも抱え込む人間の記憶を他者に差し出し、分有する回路を見出した。

このように読めば、台湾が過去百年間に経験した儒教的家父長制や国家権威の暴力によって覆い被された痛みの記憶が、語られることのないものとして、『自伝の小説』の語りの隙間に宿り、滲み出していくことが明らかになる。すると『自伝の小説』は、歴史の圧力が造り出した無残な断層を直視しながら、台湾の歴史社会の周縁へと追いやられた存在の生の物語を語ることを可能にする語りの空間として再解釈することができるのである。

[1] 本論文で依拠するのは藤井省三による日本語訳『自伝の小説』である。

[2] 山根知子「李昂『自伝の小説』について」法政大学大学院私小説研究会編『アジア文化との比較に見る日本の「私小説」』二〇〇八年、一二一頁。

[3] 該当する先行研究は極めて多岐にわたり、ここですべてに言及することは難しいが、特に楊翠、邱彦彬、林鈺婷、張瑛姿らの議論が挙げられる。

[4] 藤井省三「解説」、李昂『自伝の小説』藤井省三訳、国書刊行会、二〇〇四年、三四七頁。

[5] 劉亮雅「九〇年代女性創傷記憶小説中的重新記憶政治」『中外文学』 二〇〇二年、一五五頁。

[6] 李文茹「〈私〉はナショナリズムを超えられるか――「台湾文学」をめぐって――」法政大学大学院私小説研究会編『アジア文化との比較に見る日本の「私小説」』一二六頁。

[7] 李昂「序 誰の自伝か、誰の小説か」『自伝の小説』藤井省三訳、国書刊行会、二〇〇四年、二頁。

[8] 上野千鶴子「李昂の新しい冒険――〈女〉と〈女たち〉をめぐる物語」『東方』第二九三号、東方書店、二〇〇五年、三二頁。

[9] ジュディス・バトラー『触発する言葉　言語・権力・行為体』竹村和子訳、岩波書店、二〇一五年、二〇六頁。

[10] 佐藤嘉幸「解説」、ジュディス・バトラー『アセンブリ　行為遂行性・複数性・政治』佐藤嘉幸、清水知子訳、青土社、二〇一八年、三一四頁。

[11] ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体』佐藤嘉幸監訳、竹村和子、越智博美訳、以文社、二〇二一年、三一八頁。

[12] 大橋洋一「サンティアゴの変容」『差異と同一化　ポストコロニアル文学論』山形和美編、研究社出版、一九九七年、六二頁。

[13] ホミ・K・バーバ『文化の場所　ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也訳、法政大学出版局、二〇一二年、viii 頁。

[14] 藤井省三「解説」、李昂『自伝の小説』藤井省三訳、国書刊行会、二〇〇四年、三四五頁。

[15] 佐藤嘉幸「解説」、ジュディス・バトラー『アセンブリ　行為遂行性・複数性・政治』佐藤嘉幸、清水知子訳、青土社、二〇一八年、三一四頁。

[16] 山根知子「李昂『自伝の小説』について」法政大学大学院私小説研究会編『アジア文化との比較に見る日本の「私小説」』二〇〇八年、一二一頁。

[17] 張原銘「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察――陳芳明によるポストコロニアル研究の展開――」『立命館産業社会論集』第三十九巻第三号、二〇〇三年、七七頁。

[18] 同前注。

[19] 陳芳明『後殖民台灣――文學史論及其周邊』麦田出版、二〇〇七年、一一九頁。

[20] 男子の髪形。清朝は漢民族にこれを強制した。（『デジタル大辞泉』）

[21] ジュディス・バトラー『戦争の枠組み――生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳、筑摩書房、二〇一二年、五二頁。

[22] ジュディス・バトラー『触発する言葉　言語・権力・行為体』竹村和子訳、岩波書店、二〇一五年、六三頁。

[23] 藤井省三「解説」、李昂『自伝の小説』藤井省三訳、国書刊行会、二〇〇四年、三四六頁。